

本苑子

滝沢馬琴
上



文藝春秋

滝沢馬琴 上

昭和五十二年七月十五日 第一刷
昭和五十三年四月十五日 第二刷

定価 九八〇円

著 者 杉 本 苑 子

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 大日本印刷

製本 大日製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

滝沢馬琴
上

その朝、いつもの通り神田明神かんだみょうじんの本殿で打ち鳴らす正六ツの、勤行じんぎょうの太鼓で目をさました馬琴は、これも、ものごとろついで以来の習慣にしたがつて自分の手できちッと床とこをあげ、雨戸を一枚一枚、手ばやく繰くった。

物音を合図に家族全員が起き出すのも、滝沢家での朝の慣例である。

庭は霧が濃かった。

濡れてすべりそうな敷石を、用心しいしい踏んで裏の井戸へまわり、備えつけのうがい茶碗に水をみたと、まず、音をたてて口をすすぐ……。つづいても、肌ぬぎになって、顔や首すじを洗いかかる。

歯はとうに、一本のこらず抜けてしまっているから、楊子ようじを使う必要はない。そのかわり洗顔は入念をきわめる。両足をふんばり、かたくしぼった手拭で赤味がさすまで、上半身をこすりあげ、こすりおろすとき、老いて脂肪が落ちただけに、骨組みのたくましさが目だつ馬琴の長身は、

机に倚よっているうしろ姿より、なおひと嵩かさもふた嵩かさも大きく見えた。

手の墨すみは、ことにたんねんに洗う。四十年を越す著作稼業で、干した貝柱さながら変質してしまっている右中指の筆ダコ……。ここばかりは無数の亀裂きれつのあいだに頑固がんこに墨すみを沁しみこませて、そのどすくろさを変えようとしない。落ちないのは承知しながら、劣らぬ頑固さで馬琴も目のかたきにここをこする。

耳のうら、耳の穴……。こごんで、瘦やせ脛すねまでを力いっぱい拭きおろしたあと、たっぷりめの水でこくめいに手拭のよごれをすぎ出して、さて、はじめてさっぱり醒さめた眸めを周囲の木々へ向けるのである。

入浴ふろぎらい、わけて銭湯は大きらいの彼が、六十七歳の皺しわ、たるみはやむをえないにしても、つねに垢かみづかない、揉もみ紙しに似て白く乾いた皮膚をしているのは、この、朝ごとにくりかえず井戸端での日課のせいなのであった。

あと二、三日で十月——。冬にはいろいろとしている庭は、敷地五十坪のうち建物にそのなかば近くをとられているから、勝手口の空地を加えてかつかつ三十坪ほどしかない。

だが、それにしては樹木が豊富だった。引越してきた当座は小さいながら池を掘ったし、築山つきやま、花圃かぼまでこしらえた。医者を開業していた息子の鎮五郎宗伯ちんごろうそうはくは下子げし、サフラン、桔梗ききやうといった薬草類を花圃に植えたが、やがて病氣のため医業を廃してからは、百姓そだちの婿清右衛門の手でもっぱら野菜がつくられている。

小梨子こなし、豊後梅ぶんごううめ、枇杷びわ、朝鮮柘榴せうしんざくろ、蜂屋柿はちやがきなど、井戸まわりの裏庭には実のなる木もすくなくない。三畳の西窓にはブドウ棚があつて今年は五百房ほど実をつけた。自家用に少量つかうほか果実は毎年、湯島二丁目の水菓子屋に卸おろして家計のたしにする。秘蔵の林檎りんごにはよく虫がつき、

小管で塩水を吹き入れたり花火でいふしたり、いろいろこころみてみるのだが今年もなりは良くなかった。

「日あたりの具合かな」

寄つて枝をふり仰ぎながら馬琴はしきりに顔の前を払つた。糸屑か煤のようなものが、さつきからうるさく目の先に浮遊している……。まづげに何かついているのかと思ひ、まぶた瞼をこすつたがとれない。

霧をまとつた隣家の屋根、淡々と、さらに白い明神社の森に視線を放つと、煤の存在はいつそうきわだつ……。眼球の動きにつれて煤も移動するのを見て、異状は目の中にあるのだとやっと気づいた。

馬琴はひとみを凝らした。力をこめて二、三瞬、宙を睨んだ。と、煤がいきなり散大し稲妻状に岐れて視野をふさいだ。ガアンと耳の奥が鳴つたようにも思えた。あわてて書齋へひき返しかけたせつな、黒い稲妻はみるみる拡がり、右の目が急にまっ暗になった。

よろめいて馬琴は井桁につかまつた。とっさには何のことかわからなかった。が、すぐさつた。否応なくさとらされたといつていい。

（失明だ。とうとうやられた！）

ひとの二十倍、三十倍も目を酷使している日常である。危惧はしていたのだ。かたく目をとじ、また、恐る恐るあけてみた。痛みはない……。

（左は見える）

馬琴は肩で喘いだ。

（たすかった。左は見える。左だけはとりとめた。……よかつた。たすかった！）

氣を鎮め、とり落とした手拭をひろいあげて足さぐりに縁へ廻った。眼界がにわかに狭く、歪いびつになった感じで、歩きづらいことおびたらしい。

「宗伯」

息子を呼んだが、返事よりさきに耳にとびこんできたのは、癪さかばしった、そのくせ舌たるい老婆お百の大声であつた。

「だからさア、おみおつけの実でも買ひに出かけたんだらうって、言っているんだよ」

「そんなはずはないよ母さん。私わたしが起きたとき、お路みちの寢床はもう、たたんであつたんだ」

負けずおとらずの大声で宗伯も応じている。慄おそえをおびた、やはり癪さか声こゑだが、母よりも言い回しは早く、語氣がするどい。

「朝っぱらから何をさわいでいる」

くつぬぎに立った父へ、

「お路とさちがいないのです」

せきこんで答えたのも宗伯である。

お路は宗伯の妻、さちいは生後一カ月になる彼らの次女だ。

「きのうの今日ですからね。さちいをつれて家出でもしたのではないかと……」

「氣にするくらいなら喧嘩けんかなんぞしなければいいのさ。ばかばかしい」

吐いてすてるようにお百はきめつける。

宗伯夫婦は、昨夜いつもの諍いさかひをした。原因などとるにたらない。狂氣じみた血相で一方的にさげび立てたのも、例によって宗伯のほうだ。

自身、どうにもならない癪癆はつさの発作に、彼は時おり襲われる……。顔面を青澄ませ、出ばりぎみ

の両眼に血のすじを走らせて、母を嘲り妻を面罵し、このときばかりは馬琴の制止にさえ耳をかさない。そのうちに息が切れてくる。胸をかきむしり、絶息寸前の興奮状態におちいったあげく、「私みたいな男のところへきてお前は悔いているんだらう？　そうだらう？——出て行つていいんだ。出てゆけッ」

妻に投げつけるきれぎれの言葉もきまっていた。

それをまた、すこしでもやさしく、なだめるなり介抱すればよいのだが、日ごろの無口がますますむつとりと押し黙って、かたくなな反抗を満面にたぎらせ、夫の狂態へ白眼を向けるお路の性格だし、ところへお百の、支離滅裂な愚痴と泣きしゃべり、幼い孫どものわめきまで加わっては、版元に居催促されている多忙のさなかですら馬琴は筆を投げ出さざるをえない。

ひそかにこのさわぎを、彼は「内乱」とよび、

『家の中がおさまらないのは、家長たる自分の不徳の致すところだ』

などと自戒めいた文字を日記に書き並べるけれども、本心の底の底は、めいめいあくがつよく、我意を撓めようとしないう家族への、一杯な憤懣で占められていた。

ただ、自分まで「内乱」に巻きこまれては世間態があまりにみぐるしい。醒めた人間が一人でもいるのだということを、たとえ人に見せない日記の中でだけでもはっきりさせておかななくては自尊心がゆるさない。恥に対して異様なほど馬琴の嗅覚は敏感だった。

「婚礼したての花嫁ではあるまいし、お前の荒れには馴れているはずのお路だ」

と、この朝もつとめて平静な語調で、彼は宗伯をたしなめた。

「家出などするはずはない。お百の言うように惣菜でも買いに出たのだらう」

「しかし、さちを生んで一カ月にしかない身体ですからね。このところ気が昂っていたよう

です」

「心配なら、心あたりを見にやらせればいい。——太郎……太郎はいないか」

いま一人いる孫の名を、馬琴は呼んだ。かん高い返事が圓の方角から聞こえ、六歳になる宗伯の長男が腹巻をたくしあげながら走ってきた。

「おふくろをさがしてこい。豆腐屋にでもいるはずだ」

「ちがわア、昨日の朝もお豆腐だったもん、おみおつけの実なら今朝は若布だよ。乾物屋をさがしてくらア」

小しやくな頭の回転をみせて太郎は玄関をとび出してゆく……。

そのまま書齋へあがろうとして、馬琴は思わず顔をしかめた。いつもなら洗顔をしているまに、蕪雑なやり方ではあるが女たちの手でひと通り掃除がすんでいる。手焙りの上では鉄びんもたざりはじめる時刻であつた。

今朝はだが、どこもこれも夜の乱雑のままではないか。綿ぼこりがクルクル舞っている縁側……。昨夜おそくにでも洗ったのだらう、茶の間にはなま、乾きの赤児のおしめが干し散らしてあるし、お百の寝間などは襖のすきまから、いぎたなく、まだ敷きっぱなしの布団まではみ出して見える。普段きちようめんな宗伯すらねまきを常着に着かえてもいない。

(いよいよこんどこそは、お路も辛抱をきらしたのではないか?)

口とは逆な危ぶみにじつは突きあげられているだけ、選りに選つて右眼失明という災厄の朝、人さわがせをしてのけた嫁に、馬琴も無性に腹が立ってきた。

「床ぐらい、さっさとあげないか」

八ツ当りぎみに叱りつけられて、お百は唇をねじ曲げた。

「持病の頭痛がひどいんですよ今朝は……。もうすこし寝ていたかったのに……」

それでもふしようぶしよう布団を押し入れにおしこんでいるあいだに、宗伯は着替えをすませ、洗面用具を手に縁先へ出てきた。

右手を右の目にあてて、あいかわらずくつぬぎに突っ立ったきりの老父の姿に、やっとこのとき彼は不審を感じたのだらう、

「どうなさいました？ おあがりにならないのですか？」

おびえたように問いかけてきた。

「いま、あがる」

口では応じながら、やはり同じ場所を動かずに、

「ついさっき……右眼が見えなくなったのだよ」

馬琴は言った。

「なんですって!？」

「診てくれないか。どうなっているか……」

動顧どうてんしたらしい。お路の安否などたちまち念頭からけし、とんだ顔つきで熱心に父の目へ、目を近づけていたが、

「ふつうです。左とすこしも変わりませんよ」

宗伯はふしぎそうに言った。

「そうかなあ、まっくらなのだが……」

さらによく、覗きこんで、

「そういうえばほんの少々、眸ひとみが上のほうに流れています。三黄湯を作りましょう。大いそぎで洗

眼してください」

そそくさ調剤所へ去りかけるのを、

「いまさらあわててもはじまらない」

馬琴はとめた。

「ゆだんだったのだ。読書筆硯^{ひつげん}の疲れはもちろんだが、冬ごとに火鉢を机の右わきに置いて手をあぶっていたらう。火気で目が乾いて失明したのだと思うよ。古い木の片枝が枯れたのと同じだ。左は何でもないのだから仕事にすぐ、支障をきたすこともない。あきらめよう」

「いや、一応、専門医に診せなければ……」

「眼科に知り合いはいます」

「土岐村がいいです。父親のほうは内科のほかにも目もやるそうですから……。母さんッ、母さんッ」

台所のお百を呼びたてているところへ、

「いないよ。豆腐屋にも乾物屋にも、それから八百屋にも……」

太郎が息せききって駆けもどってきた。母親のふいの不在が尋常のものでないことを、子供ごろにも感じはじめたのか、緊張し、目を光らせている……。

濡れ手を前垂れで拭き拭き座敷へはいってきたお百が、

「どこにもいないって？　じゃあ、やつぱり出ていっちゃまったんだねお路は……」

呆れ顔で言うのを聞くなり、太郎は息をつめ、つぎの瞬間、わッとありったけの声をあげて泣き出した。

「それどころじゃないんだよ母さん」

宗伯がじれったげにさえぎった。

「父さんの目が、見えなくなってしまうんだよッ」

「目!?……目がどうしたって?」

お百の声が尖った。ひどい斜視のせい、彼女の神経は目という言葉だけで、不穏な反応を起すのだ。馬琴は手をふった。

「さわぎ立てるほどのことではない。右だけだ。仕事はできるのだよ」

お百はしかし、頭痛膏を貼ったこめかみを両手でおさえて、

「ああ、ああ」

大仰なうめき声をふりしぼった。

「なんてこったろまあ、こんな取りこみの日に家出するなんてお路も勝手な女じゃないか」

「あいつのことなんかより医者だ。土岐村のおやじさんに来てもらわなくては……」

息子のうろたえに、

「その土岐村を呼びに行くにしたって、さっそくお路がいなきや困るだろ。下女は暇をとってるし、お前はそうやって家の中でさえ杖をついて歩く半病人……、私だって今朝は、頭が割れそうなのをこらえこらえご飯の仕度をしているんだよ。これっきりお路に出てゆかれてもしてごらん、どうなるかわかっているだろうに、お前も無考えな人だ」

お百は言いつのり、またいつもの母子喧嘩がはじまりかけた。

「みっともない、だまんなさい。近所隣りが聞き耳をたてるじゃないか」

馬琴は舌打ちした。

「駕籠仙の若い者に言いつけて、清右衛門を呼びにやらせればいいのだ。——太郎、すまないが

もうひと走り駕籠屋まで行ってきておくれ」

「うん」

しゃくりあげながら、それでも出てゆきかけた出会いがしらに、当の清右衛門が、幅ひろい胸板で庭木戸を押しあけるようにはいつてきた。手にさげているのは魚籠である。

馬琴のむすめ婿で年は四十七——。舅姑にはもちろん、義弟にあたる宗伯にさえ慇懃なものがしを崩したことのない実直者だ。飯田町の薬店を妻のお幸にまかせて、雑用を弁じに、ほとんど三日にあげず彼は舅の家へ出かけて来ている。

「あ、清さん、ちようどよかった。迎えをやろうとしていたところなんだよ。今朝はばかに早いじゃないか」

宗伯の急きこみとは対照的に、

「なま物の、到来物がありましたのでね」

清右衛門の口ふりは重い。動作も緩慢だが、やることは無類に手がたく的確だし、なによりは骨惜しみの気配がまったくなかった。滝沢家にとっては重宝この上ない縁者といつてよい。

「鱈ですよ。うちの向いの箔屋さん……。夜釣りに出かけてましてね、こんなのを四匹あげたというので、まだ暗いうちから近所中をたたき起こしての自慢なんです」

「おすそわけだね、ありがとう」

ほとんどうわの空で、

「さっそくだけど土岐村まで使いに行つてくれないか。元立老にきてもらつてほしいんだ」

宗伯は言いつけた。

語尾に、かすかなうしろめたさがゆらぐのは、土岐村がお路の実家だからである。妻の家出さ

わがに彼がことさら触れないのも、父親の元立さえ来れば、しぜん、その所在がわかうとの判断からであつた。

「元立さまを？　どなたか加減がお悪いのですか？」

「なに、目だよ。じつは先刻、井戸端でな」

「かいつまんで馬琴は語り、

「元立なんぞに診せても診せないでも同じことだと思ふのだが、ほかにこれといつて眼科の心あたりがないのでな」

言いわけがましく言つた。

「お目が!」

めつたに喜怒をあらわさない清右衛門の表情が、さすがにこわばつた。

「それはいけません。さつそく行つてまいります。……おつ姑さま、これを……」

鱸の籠を渡すなり、前のめりに出て行こうとする背へ、

「ついにて御成道の美濃甚へも寄つてきてくれなにか清さん」

あわただしく、お百は口入屋の名を言つた。

「たのんでおいた下女の口はどうなつたかつて……。病人と子供ばかりだし、早くなんとかしてくれなくては困るって……」

「かしこまりました。おつつけもどります」

——とうに朝食の刻限は過ぎていた。

口叱言をつづけながらお百は釜の下を燃し出したが、馬琴は食欲をまったく失つていた。右眼

だけの損失ですんだのを不幸中のさいわいと氣強くよろこびながらも、やはり衝撃はなみなみでなかったのである。

宗伯は熱を出した。彼の参りかたは当の父以上だった。はつきり形をとって現れたお路の反抗にも宗伯は内心、恐怖していた。

清右衛門が出ていって四半時ほどすると宗伯は慄え出し、悪寒、胸痛を訴えはじめた。持病である。そのくせ寝ろといっても言うことをきかない。

「私のは体質です」

唸りながら、居間の地ぶくろの前に正坐しつづけるのもいつものことだ。

病人じみるのを何よりもおそれ、よほど苦しいときだけ手枕、小掻巻ぐらいで横になるけれども、病床ときまつたものはかたくなにしつらえさせようとしなかった。

……帰路、口入屋へ廻った清右衛門より先に、やがて土岐村元立がやってきた。

長男の元祐とともに三浦監物家の抱え医師をつとめ、かたわら自宅開業もしている氣さくな老体である。馬琴に負けずおとらずの大男だが、このほうはうしろ首が肩にめりこむほど肥えて、湯あがりさながら血色のよい、たるみひとつない肌をしている。酒好きの遊び好き……。医術よりは弁口で世渡りしている幫間医者だと、嫁の親もとながら馬琴の評価は日ごろ元立父子にきびしかった。

この日も玄関の格子をあけるなり、

「いやあ、お驚きなされたらう滝沢先生」

手ぶりをまじえての大げさな慰藉といっしょに、のしのし書斎へ通り、狎れのあまりの無作法を何よりも不快がる馬琴の性情など頭から無視して、挨拶ぬきに元立ははじめた。